

# 「住まいと暮らしの未来を考える」

【第4回】

… これからのコミュニティを考える …

2011. 04. 13

公益財団法人 ハイライフ研究所

主任研究員 榎本 元

## コミュニティの意味するところ

コミュニティという言葉は、1969年(昭和44年)、国民生活審議会調査部会で取り上げられ、広く一般に使われるようになった。そこでのコミュニティの概念は「市民としての自主性と責任を自覚した個人及び家庭を構成体として、地域性と各種の共通目標を持った開放的で、しかも構成員相互に信頼感のある集団を、我々はコミュニティと呼ぶことにしよう」とされている。

おりしも、1970年代に入ろうとしている時代である。首都圏のニュータウンや都市部に地方から大挙して人々が移り住み、通勤ラッシュや公害、過密と過疎の問題が浮上してきた時代である。新住民と旧住民の摩擦、マイホームや子供の個室に代表される個人主義の台頭、古き良き時代のムラ社会的な生活共同体意識が薄れ、高度経済成長を旗印に邁進していた時代である。そんな時代背景の中で、今まで自然発生的に存在していたコミュニティは、初めて意識的に取り組む必要のある概念として多くの人々に自覚され、新しい時代に相応しい新しいコミュニティの構築が叫ばれたのである。すなわち、自然や成りに任せるのではなく、自覚を持ってコミュニティを創り出す必要があるのだと。

そんな時代から、まだ半世紀も過ぎてはいない。そして今、また、コミュニティである。

無縁社会と呼ばれ、生活弱者が社会からこぼれ落ちていく時代。

持続的な都市や社会の形成をめざすべき時代。

ネット社会の到来により地域に根ざす必然性が薄まり始めている時代。

そして、経済成長の御旗に寄り添うことが出来ず、心の満足感が必要となる時代。

そんな時代だからこそ、今、またコミュニティが問われ始めている。

コミュニティの解釈は多種多様あるが、ここでは最初に使われた言葉の意味にのっとり、「コミュニティ=ある集団」のこととしよう。「ある集団」は「共通の目標」を持っている。「ある集団=コミュニティ」に属する人々や家庭は、互いに自主性と責任を持った「起立した誇り高き個人」である。しかも彼らは互いに信頼し合い、また、「コミュニティ=ある集団」は多くの人々にその門戸を開いている。更に重要なことは、その集団は「どこかの地域」に根ざしている。

そんなコミュニティは1970年代以降、日本のどこかに本当に存在しているのだろうか。

例えば、こんな問いを投げかけられたら、あなたは何と答えるだろう？

「あなたは、どんな「コミュニティ=ある集団」に参加(帰属や所属でもいいが)していますか？」と。

## コミュニティの重要な構成要素。

コミュニティに関しては多種多様な解釈や定義があるが、しばしば、二つの重要な構成要素があるとされている。

一つ目は「共同性」である。

共同性は、一緒に生活をしていけば、作法、伝統、話し方など自ずと共通の特性を持つことを指す場合や、共同することで得られる様々な実利的な利得の場合や、自らのアイデンティティの確認や精神的な安定という心理的な共同性を指す場合がある。いずれにしても、そのコミュニティに所属することで物理的、精神的な何ものかを得る、あるいは所属した結果、生じるものことに他ならない。

二つ目は「地域性」である。

地域性とは居住する物理的空間である。コミュニティを論じる時、この地域性の枠から大きく外れることはない。

これからのコミュニティを議論する時に特に問題になるのは地域性に関してである。

そもそも、なぜコミュニティにおいて地域性が重要な要素と言われているのだろうか。

ネット社会の現在では、地域を優に飛び越えた無数のコミュニティが存在しており、そのコミュニティだけで、人は楽しく生きていくことができるのではないだろうか。なぜ、生活形態も趣味もライフスタイルも物事の考え方も異なる近隣とコミュニティを形成しなければならないのだろうか。そもそも地域性とはいかなるものか。地域に根ざした、あるいは、ある一定の地域を一つの範囲とした、あるいは、地域という枠の中に存在するコミュニティがなぜ必要とされるのか。必要とされるのであれば、それが果たす役割とは一体何であろうか。コミュニティを論じる時、絶えず地域性という言葉が誰もが口にするが、これからのコミュニティを語るなら地域性という言葉そのものを取っ払う必要があるのではないのか。

地域性という言葉から無数の疑問と違和感が湧き上がってくる。

## 地域性という呪縛。

そう遠く無い昔、農耕によって生計をたてていた時代は、仕事と土地が結びつき、その土地に縛られていた。その土地から離れれば生計をたてる手段を失い、路頭に迷うことになる。生きていくためには、土地から農作物を得るだけでなく、その土地の周囲に居住する地域住民と、良好な関係を保ち続けることが必須となる。

すなわち、当時の地域に根ざしたコミュニティとは生きていくための必然であったのである。そのコミュニティにうまく所属していないと土地すなわち職業を失いかねない。生きていくための必須課題だったのだ。

しかし、現代はかなり様子が異なる。

仕事と土地が切り放され、特に仕事を抱える父親、最近では母親も、その土地に対する帰属意識は無い。周囲の住民と良好な関係をがんばって保たなければならない必然性など微塵も無い。特に悪い関係になることさえ回避できればよいので、周囲の住民と何ものも関係を持たないことが単純な解決策となる。わずらわしさからの開放を願い、面倒なことを徹底的に回避する。自らが周囲の住民から干渉されたくないため、自分も干渉をしない態度を保ち続ける。

では、なぜ、地域という枠の中に存在するコミュニティが必要とされるのだろうか。あるいは、そう叫ばれるのだろうか。

こんな風に仮定してみるとどうだろう。

一つは生活弱者と呼ばれる人々の生活を助ける誰かが必要とされているからと仮定してみる。それは独り暮らしの高齢者であったり、障害者であったりする。行政や国が機能仕切れていない役割を地域に根ざしたコミュニティが担うのだ。

二つ目は災害などによる危機的状況が訪れた時に真の役割があると仮定してみる。真っ先に頼りになるのは遠くの親戚よりも近くの他人であると言うことである。あるいは日常的な安全や安心を保障するために地域のコミュニティが機能するという考え方である。

三つ目はどこかの地域に所属している安堵感を感じると仮定してみる。これは地域を日本という言葉に置き換えると分かり易いかもしれない。同じ方言、同じ仕来たり、同じ風習。日常生活を余計なストレスを感じることなく生活できること。常日頃、意識することは少ないが、所属している、守られているという安堵感は心の平穏を保障する。

四つ目はその地域においてある種の役割を担うことになった場合、その地域から価値ある存在として認められ、尊重されることに意義があると仮定してみる。価値を認められることはその人にとって非常に大切な心の支えとなる。自治会や商店会の会長、地域の防犯委員長など、尊重されることが生きがいにつながる。

五つ目は地域にいたることが自己実現につながる場合があると仮定してみる。自然と共に生きたいと願えば、山間部のひっそりとした集落に住むことが自らのアイデンティティとなる。自給自足で自らの暮らしそのものを創造することを楽しみ尽くすのである。

## **コミュニティには欲求される段階がある。**

ここまでの5つの仮定話は、一つの説を下敷きとして語ったものである。

それは※マズローの欲求段階説である。マズローは人間の基本的欲求を低次から5段階に設定した。

1. 生理的欲求(生命維持のための食事、睡眠、排泄等の本能的・根源的な欲求)
2. 安全の欲求(安全、経済的安定、健康等の秩序だった状態を得ようとする欲求)
3. 所属と愛の欲求(どこかに所属し、他者に受け入れられたいという欲求)
4. 承認(尊重)の欲求(集団や所属先から価値ある存在として認められ、尊重されたい欲求)
5. 自己実現の欲求(自己の能力や可能性を最大現発揮したいと思う欲求)

人々がコミュニティに求めるもの。

それを上記の5つの欲求のどれかに当てはまるのではないかと仮定してみた訳である。

この仮定の中で、気づかされる重要なポイントがある。それは、コミュニティが必要とされる理由、あるいは、コミュニティに対する欲求には、段階があるのではないかということである。

独りの高齢者や障害者など、彼らが生きていくために必要となるコミュニティと、趣味や自己実現を求めるコミュニティとでは自ずと、参加態度や参加意識が異なるのは当然である。生理的な欲求を求める人と自己実現の欲求を求める人が同じコミュニティを形成することは非常に考えにくい。

更に、欲求が高次になるほど(自己実現欲求に近づくほど)、地域性という枠組みからはどんどん距離が離れていく。しかもネット社会である。同一の趣味を持った人がたやすくネットワークを組むことが出来、地域に所属欲求や尊重欲求、自己実現欲求を求めなくても、それは別の集団で容易に手に入れることができる時代である。

コミュニティの重要な構成要素の一つである地域性は、人間の原初的な、あるいは根源的な欲求と結びつかない限り、達成することは困難であると考ええる。安全、安心をお金で買う時代と言われて久しいが、お金を払うことのできない弱者のために、地域に根ざしたコミュニティが必要になるのである。それは現代社会に生きる多くの人々にとっては、日常生活を営む上では全く関係の無いことかもしれない。しかし、人はいずれ歳を取り、健康に不安を抱え、弱者としての位置に位置付けられることになる。あるいは、天災によって一気に弱者となる可能性も否定できない。その時にこそ、コミュニティの必要性が実感されるのである。そして地域性というワードが重要性を帯びてくる。

## **安全と安心の保障。**

ここで、もう一度、先ほどの問いを繰り返そう。

「あなたは、どんなコミュニティに所属・帰属していますか？」と。

そして、こんな問いを付け足そう。

「そのコミュニティは、あなたの安全や安心を保障してくれていますか？」と。

人間の原初的な根源的な欲求に答えるために、コミュニティは必要なのである。安全、安心を保障するためにコミュニティは必要なのである。

もっと、乱暴に言ってしまうと、尊重、愛、自己実現などの欲求は、地域性と切り離された集団で十分、実現可能である。地域性がコミュニティの重要な要素と考える限り、あるいは、地域に根ざしたコミュニティを構築したいと叫ぶ限り、人間が生きていくために必要な根源的な欲求に答える地域コミュニティが必要となるのである。

## **必要なコミュニティ。**

日本は安全で安心であるという神話は今回の震災によって崩壊した。

これからの日本は経済成長という呪縛から解き放たれ、心と精神の満足を求めて、向かう方向が定かではない漂う孤島になる。自らの生活は誰かの支えによって成り立っていることを嫌というほど知ることになる。互いが関係しあい、関係性の中に存在していることを嫌がうえにも実感することになる。いざという時に自分が助けられたいのであれば、助けを必要とする誰かを助けることが大切であることに嫌がおうにも気づかされる。

最も大切で最も必要とされるコミュニティとは、安全、安心を保障する、あるいは保つものでなければならない。

それは、隣が留守のときに、少し、隣の家のことを気にかけるという態度でよいかもしれない。地域で遊ぶ子供達を遠くからそっと眺めている態度でよいかもしれない。心の片隅で、隣近所の人々をほんの少し気にするという態度が根源的なコミュニティを成立せしめる出発点ではないだろうか。

人々が求めるコミュニティには段階がある。

地域のコミュニティはいざという時の「備え」である。「備え」以外の役割は無いと言い切ってもよい。楽しみや自己実現のためのコミュニティは、縦横無尽にネットや自らが所属する学校や職場や趣味のサークルに、その役割を負えばよい。そこには地域性などない。エリアも存在しない。しかし、いざという時の「備え」のみ、地域のコミュニティが受け持つ役割であると自覚すること。それは最も必要で最も大切なコミュニティである。

人々がその自覚に目覚めた時に、地域のコミュニティは存在を許される。